



館長だより

山形県産業科学館

令和 6 年 5 月 17 日(金)

発行 館長 加藤 智 一

立てば藤 座れば桜 歩く姿は針槐

その①

館長だより第 20 号では、宇都宮に行ったことをばらしてしまいましたが、目的は餃子ではないのです。実を言うと、足利市にある「あしかがフラワーパーク」に行って、藤の巨木を見たかったのです。山形からそこに行くには、山形新幹線でまず宇都宮に行って、新幹線か宇都宮線(東北本線)に乗り換えて小山に行き、そこから両毛線に乗り換えて、あしかがフラワーパーク駅に向かうことになります。

足利と言えば、森高千里ファンなら一度は必ず行かなければならない聖地巡礼の地。名曲『渡良瀬橋』にうたわれている名所が点在する場所ですので、当然私も、ずいぶん前に行ったことありますが、花を見るために足利に行くのは初めてであります。

どんだけすごい藤かというと、樹齢 160 年を超える大藤が 1,000 畳を超える広さにまで枝を伸ばしており、日本最大の藤棚となっているのです。これはたまげた。藤棚の下に入ると、独特な甘い香りと、白や紫のかんざしのような長い房状の花の洪水に包み込まれる感じがして、別の世界へ来てしまったかのような錯覚に襲われました(言い過ぎ!)

藤の花の見頃は 4 月下旬です。ソメイヨシノが葉桜となり、梅が青い実を付け始めた頃、藤の花は満開の見頃を迎えます。藤の花には毒はありません。藤の花を触ったり、摘んだりしても毒に当たるようなことはありませんので、藤の花は洗って天ぷらにして食べることができるそうです。

藤の花が盛りを過ぎると、今度は似たような花卉を付けるニセアカシア(針槐・はりえんじゅ)が満開の時期をむかえます。昨日、霞城公園南門付近を自転車で走行中、藤よりも強く甘い香りが漂っていることに気が付きました。案の定、公園内のニセアカシアの大木はいずれも満開状態。我が世の春(初夏だけど)とばかりに咲き誇っているではないか。

なぜ霞城公園にニセアカシアの大木が整然と並んでいるのかといえば、推測ですが、元はここ、陸軍の練兵場だったからではないかと思えます。たいした根拠ではありませんが、もともと外来種のニセアカシアが日本に渡来したのは明治初期で、北海道の開拓使が北米から輸入し、札幌農学校の畑に試験的に植えたものを起源とする説と、東京府下(当時)の練兵場に植えられたものを起源とする説があるの

だそうです。ですからもしかしたら、当時の全国の練兵場には、結構な数植えられていたのではないかと推察したわけです。

ニセアカシアは、丈夫で成長が早く、砂防や土地改良のため山奥に植栽されたものが河川を伝って広がり、各地で野生化しました。今では路傍や川原、雑木林などで頻りに目にするようになりました。またニセアカシアは、他のマメ科の樹木と同様、根に「根粒菌」という菌を共生させており、根が水に浸かった状態でも育ちます(根粒菌は肥料の 3 要素の 1 つ、窒素を蓄えることができます)。また、横に張った根の途中から新たな幹を立ち上げる性質を持つことから、条件の悪い土地にも生育可能で、爆発的な繁殖力を持ちます。

強烈に甘い香りは香水に使われるほか、砂糖菓子、天婦羅や和え物にして食べることができます。また意外かもしれませんが、日本産のハチミツの半分近くはニセアカシアから採取されており「アカシア」と表記されて売られているのです。

